

随想 夢を持ってない若者

生き物を扱う生産業界の役割とは

加藤 宏光

たけしの人気番組『日本教
育白書』（〇八年十一月二十二
日放映分）で取り上げた特集
に、「現代の若者は夢を持たな
い」ことに関する議論があっ
た。

いわく、現代の若者は夢を
持たない、持てない時代だ。
たけしは逆説的に言う。

「猪木（アントニオ・猪木）
氏は、若者に一週間位食事を
させなければよいと言ってい
た」。たけしは無造作に語る
「夢を達成させた人の陰には、
達成できない人が沢山いる」
と。

著者の若かった時代には、

多くの仲間が夢を語り合った
ものである。いつしか、若者
の多くは夢を語らなくなった。
何故だろうか？

確かに、われわれ世代の若
かった今から四〇〜五〇年前
（昭和三十〜四十年代）は、戦
後の何もない時代からの再出
発であり、すべてを得たい、
作りたいという欲求が共通心
理としてあったことは否定で
きない。なかなか持てないか
らこそ、そのモノを持てる境
遇になることが誰もが持てる
夢であった。

では、現代の若者に目を向
け直してみよう。先週、中国
の海外出国人員研修センター

を見学した。そこには、日本
へ研修生としてノミネートさ
れた候補生が必死の思いをか
けて学んでいる姿を見た。間
違いなく、彼らは、前途に夢
を見ている。平均的日本人な
ら誰でもが当たり前のことと
して手に入れていたモノ（あ
るいは、モノを手に入れるた
めの金）を得ることが、彼ら
の具体的な夢である。

しかし、われわれが「夢」
という表現を使う時、中国研
修生の「夢」と日本人が（身
近な日本の若者に）持って欲
しいと願う「夢」とを混同し
ている。

わが国の若者にとって、中

国研修生が願うモノはあって
当たり前の条件である。夢で
はない。そして、われわれが
若い世代に期待する夢は、もっ
と漠然としながら、もっとス
ケールが大きいのである。

では、平均的な日本の大人
が今の今自分にどういった夢
を持っているのだろうか。著
者の研究所に足掛け一六年勤
める獣医師がいる。彼が社会
人一年生の時に、彼の夢を尋
ねた。彼の答は「自分の家を
持つこと」であった。著者は
「家が夢なら、一生かけて、家
しかできない。一生かけて自
分にしかできないことを探し、
達成することがさらに大きい

夢になるのでは」と語った。彼はその言葉を大事にしつつ研鑽を重ね、業界になくはならない人間として、実力を発揮している。

また、さらに若い高卒スタッフが本年春より公立文科系大学の二部に入學した。フイリピン大学から著者の研究所に留學し、昨年博士号を取得して帰国した留學生に「貴方は五年後の自分をイメージしていますか？ 将来に夢を持っていますか？ 後悔しないために、夜學でよいから進學しなさい」と奨められたのであった。

自分を表現できる環境が欲しい。その欲求は皆にある。しかし、生産活動の場である社会に誰もが自己表現の場があるとは限らない。

昨日(十二月二十四日)、三一歳の母親が一歳一〇か月の自分の子供(女兒)の点滴に腐ったスポーツドリンクを注入し、逮捕されるというおぞましい事件が明らかにされた。

この女性には殺意がなかったと自供していると報道された。代理ミュンヒ・ハウゼン症という神経症の疑いがあるとのことである。ミュンヒ・ハウゼン症というのは、周囲の耳目を集めるため自傷する神経症で、身近な誰かに代理させると代理ミュンヒ・ハウゼン症というのだそうである。もしこの事件がこの説とおりであったとすれば、ここにも自己を認めて欲しいという欲望を表現できない病状が表れているように思われる。観点を変えれば、記憶に新しい秋葉原事件の加藤被告も《自分を社会が否定している》という逼塞感を訴えていた、と伝えられていた。

著者たちの若かった時代にも、一五年前も現在も、自己表現の夢に立ち向かう人の絶対数は変わらないのかもしれない。物質的な欲求が夢である人もやはり、自己表現を求めている人と同じく目が輝いている。

働く喜びを感じにくい社会になってきていることは間違いない。一握りの自己表現できる人たちの情報を自分にかぶせて『自分だって』と思いついて込む若者は多い。かつての親に比べれば、子供の時代に親が自分を家族の中心に据え、勉強する子がよい子、競争に勝つ子がよい子、名門大学へ進学する子がよい子、さらには親自身が他人に自慢できる子がよい子、として育てられた若者が社会に出て、《自分が中心でない》という現実直面した時に感じる逼塞感と劣等感を、今の育児する親が自覚しているだろうか。また、社会自体がカネ至上で動き、生産が装置化され、職場で人を育てる必要を感じなくなっていることはないだろうか。こうした環境をわれわれは《働くことに喜びを感じにくい》と簡単に表現して済ませてしまいがちである。

生き物を扱う養鶏産業では、働く人の気持ちに籠ればその

分だけ生産性が向上する。これは現在でも生きている事実である。

かく言う著者も、「近頃の若者には夢がない」と歎くことが多かった。

話は変わるが、最近の若者は本を読まない、という。しかし、ある本に因れば昔も本をよく読む人の比率は数パーセントであったそうなる(三とか四パーセントといった数字だったと記憶する)。だとすれば、若者だけでなく、昔から本を読む人はさほど多くなかったのかもしれない。今も昔も、真の意味で夢を追う人は少なかったのかもしれない。今も昔も本を読む人が決して多くはなかったように。

改めて、今後を担う若者が社会で育成することに目を向け直すことが重要であると実感する。生き物を扱う生産業界だからこそ、その役割を率先して果たせるように思うのは著者だけだろうか。